

1. 単元名 つなごう！草津の農産物「ベジクサ」の魅力発信プロジェクト

～産・官・学・民が協働する全校の系統的なESDの実践～

2. 単元目標

- ・草津の農産物「ベジクサ」（「草津メロン」や「愛彩菜」、「琵琶湖元気アスパラ」、「春大根」「琵琶湖からすま蓮根」など草津市産の農産物の総称を「ベジクサ」と称している）について調べたり、「ベジクサ」農家の方からの話を聴き、「ベジクサ」について興味を持ち、地場産業について理解を深める。
(知識・理解)
- ・日本の食料自給率低下の問題を学級全体で考え、「日本の食料自給率低下の原因」と、そこから「日本の食料自給率を上げるためにできること」について考えることができる。(思考力・判断力・表現力)
- ・校地内に畑を開墾し、ベジクサの1つである「春大根」を栽培することで農家の方の思いを知り、生産と消費の課題、あるいは農家が抱える課題などに気づき、これら複合的な課題解決に向けて取り組むことができる。また、ベジクサの魅力を発信したりすることができる。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

滋賀県は自然豊かで、日本一大きな湖である琵琶湖があり、それらすべてが教材になるような日本でも珍しい場所である。その滋賀県では、小学校段階で「うみのこ」「やまのこ」「たんぼのこ」という教育活動がある。そこでは雄大な自然の中に飛び込み、生徒たちの五感で持って環境学習を行う取組がある。本単元では、松原中学校区で多く生業とされている農業を中心に学習を進めていく。特に草津の農産物である「ベジクサ」を教材として取り上げ、本県で日本古来の食文化を支えてきた「ベジクサ」の魅力をどのように発信していくかについて考える。本校では、草津市が推進する「スクールESDくさつプロジェクト」の研究指定校となり2年目を迎えるが、昨年度からベジクサ農家の方々の講演会や調べ学習を通して「ベジクサ」とその歴史背景や文化性の知識を深めてきた。そして、今年度、松原ファーム開墾にあたり、日本の食料（特に商品作物）自給率の低さを課題として考え、それを解決していくためにどんな活動が必要なのかを考える授業を行った。そこで、「現状を知ること」と併せて「畑を増やす」、「日本産の食品をたくさん食べる」など様々な考えが出た中で「地産地消」を合言葉にすることにした。

本活動の特徴として、産・官・学・民が協働しながら松原ファームの開墾から栽培、手入れ、収穫まで取り組む。学校全体だけではなく、民間企業や草津市役所、大阪公立大学、地域の方々が松原ファームの取組に賛同していただき、学校だけでは取り組めないような大きな規模の中で生徒たちが仲間と協働し、1つのことを成し遂げる喜びと達成感を味わうことができる。また、自己肯定感や主体的に取り組む態度だけではなく、未来を描いて判断する力にもつながり、職業選択に対する見方や考え方を広げてくれるような活動になるであろう。

(2) 生徒観

本校の生徒は2つの小学校から松原中学校に入学してくる。各学年5クラスという草津市内でも中規模の中学校である。500名弱の生徒が在籍しているが、本校が大切にしている「やる気」「根気」「元気」「連帯」という4つの合言葉が生徒たちにも浸透しており、何事もやる気をもって、元気にねばり強く取り組む生徒が多い。また、生徒同士の横のつながりが強く、学年としての連帯感が非常に感じられ

る。一方で、横のつながりが強いいためか一部で規範意識が低くなると、学年全体にも影響し規範意識が低くなってしまおうという傾向もみられるのが現実である。

本校では前期に松原未来学習、後期に松原ローカル学習として2本柱でESDに取り組んでいる。松原ローカル学習でベジクサの学習を始めたのは昨年度からであるが、現在の2、3年生は昨年度からベジクサについての調べ学習や農家の方々からの講演を聴き、その中から様々な課題を発見し、それに向けての解決策を考えてきた。そして、今年度に校地内に畑を開墾し、ベジクサである春大根を栽培し、収穫を目指して観察や手入れをしている。生徒たちはこれらの学習に対して前向きに取り組んでいる。特に松原ファームへの取組においてはクラスが一丸となって、目標としている工程の遂行に向けて粘り強く、また励まし合いながら取り組んでいる姿が見られた。

今後、生徒一人ひとりの主体性、行動力、実践力をつけていくために本単元を持続可能な学習とする意義は大きいと考える。

(3) 指導観

本単元の指導について、学年ごとに系統立てた指導が必要となる。1年生では「知る」、2年生では「考え、伝える」、3年生では「カタチにする」ことを大切に指導を行っていく。また、学校内で完結するのではなく、草津市全体のリソースを最大限に生かしながら、異世代との交流を通して生徒の一人ひとりの価値観や行動の変容につなげていきたい。

また、テーマであるベジクサは生徒にとって身近なものであり、保護者の中にもベジクサ農家の方がおられ、講演会ではその保護者の方が来ていただいている。そこで、そのベジクサの良さや地域における存在意義、そして、未来世代に引き継ぐべき「生産文化」であることを生徒一人ひとりに認識させたい。1年生ではベジクサについての知識を得て、そこから課題を発見し、自分たちでその課題について解決できる方法を見出していけるように協働して取り組む。その中で、多様性や責任感の醸成を図っていく。2・3年生では、今まで得たベジクサの知識をもとに、実際に畑を開墾する活動に取り組む。その中で畑の開墾から栽培、その販売までを見通した活動にするため、「日本の食料自給率低下」についてクラスで考え、その理由と解決策を考える。その動機づけとなる授業からの後に実際の畑の活動に移行することで、課題意識をしっかりと持ち、生徒に主体的に取り組ませたい。最終的に、1年生が作成したポップアートと2・3年生が栽培した春大根を草津市の農畜産物流センターに掲載したり、卸したりする経験から将来への進路や生き方を考える機会につなげていきたい。また、ベジクサがあることで地域への誇りや郷土愛の醸成につなげていきたい。次年度には持続可能な取組になるように、さらに生徒の意見や考えを反映できる活動にしていきたい。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点 (見方・考え方)

多様性：生徒自らが調べたり、地域の方々からの話を聴いたりする中で、ベジクサの歴史や現在の苦勞、やりがいについて共有することができる。また、そこから新たな行動の一步を踏み出せる。

相互性：草津市の農産物を生徒たち自らが育てることは、地域の活性化や経済的な豊かさにつながっている。また、畑の開墾から収穫までの過程で、様々な人が関わりあって作り上げていることを理解する。

有限性：農業とは生き物の住み家を作ることである。それを私たちが食することになる農業は、生きて行く上で大切な産業である。その産業を守り続けることが大切である。

公平性：全学年の取組であり、草津市全体の協力を得られることで、誰一人取り残さない活動にできる。

連携性：産・官・学・民が協働し、ベジクサが草津だけのものではなく、滋賀県や全国の方々に魅力を発信することで、ベジクサ農家の方々が生産的に豊かになり、全国民が健やかに過ごしていくことがで

きる。

責任性：生徒一人ひとりが課題に対して自分事として捉え、それが自分たちの将来や地域の未来が持続可能なもののできるかを考える。

・ 本学習で育てたい ESD の資質・能力

批判的に考える力：草津市の持続可能な社会づくりのために、農業の現状や日本の現状を知り、考える。

進んで参加する態度：学校全体での取組として、自分に何ができるかを考えて積極的に課題解決を図ろうとする態度を養う。

つながりを尊重する態度：異世代の方々との交流の中で社会の一員であるという意識を持ち、社会を構成する一員であると自覚を持つ。

他者と協力する態度：自分の強みを生かしながら、学級や学年がチームとして1つのことを成し遂げようとする姿勢を養う。

コミュニケーションを行う力：ベジクサについてのポスターセッションや文化祭での ESD の取組発表など、自分たちの考えをまとめ伝える力を養う。

多面的、総合的に考える力：松原ファームの開墾に向けて、給食残さ堆肥を学校給食センターからいただき、食品ロスにとの関連について考える。

未来像を予測して計画を立てる力：ベジクサの栽培から収穫を通して、課題解決に向けての目的意識をもって計画を立てる。

・ 本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正を意識できる：松原ファームを中心に異世代の方と交流し、次世代に引き継げるものである。

自然環境、生態系の保全を意識できる：松原学区の土壌や天候に適した作物である。

人権・文化の尊重：地域の文化を理解し、それに根差した活動である。

幸福感に敏感になる、幸福感を重視する：異世代の方との交流で、どの世代にも幸福感をもたらすことができる。

・ 達成が期待される SDGs

3 健康と福祉 8 経済発展と働きがいのある仕事 11 持続可能なまちづくり

12 持続可能な生産と消費 17 目標達成のためのパートナーシップ

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ主体的に学習に取り組む態度
①ベジクサについて調べたり、講演会を通して農家の方が思いや農業について知識を深め、理解している。 ②松原ファーム開墾に向けて、異世代の方々からの助言を通して、開墾から収穫までの技能を身に付ける。	①ベジクサについて調べた内容をポスターセッションという形で表現し、魅力を伝えている。 ②松原ファームでの体験を通して、感じたことや将来に活かしていきたいことを相手に伝え、表現することができる。	松原ファーム開墾から栽培、収穫、販売を通して、課題意識を持ち、それを解決していくには何ができるかを考え、行動でしようとしている。

5. 単元の指導計画

【第1学年】(全4時間)

次	学習内容	学習への支援	評価
1	ベジクサについての調べ学習をする ・草津市のいいところは何だろう。	・目的意識が持てるようにする。	ア①

	・ベジクサについて知っていることは何だろう。		
2	ベジクサ農家の方からの講演を聴く ・ベジクサを栽培する上での課題は何だろう。	・農家の方々の協力を得て、課題を明確にする。	ア①
3	ベジクサについてまとめる ・班ごとに分かれて興味のあるベジクサを調べる。	・調べ、聞いたことだけでなく、自分たちの考えをまとめる内容にする。	イ①
4	ベジクサのポップアートづくりをする ・効果的に消費者にベジクサの魅力を発信できる方法は何だろう。	・消費者の目線に立って、作れるようにする。	イ① ウ

【第2・3学年】(全10時間)

次	学習内容	学習への支援	評価
1	今まで学習したベジクサについての振り返り ・ベジクサの種類にはどのようなものがあったか。 ・ベジクサ農家の方々の思いや課題は何だっただろう。	・昨年度の活動の様子を記録した写真などを提示する。	ア②
2	日本の食料自給率について考え、動機づけ ・食料自給率とは何だろう。 ・なぜ他国と比べて日本の食料自給率が低いのだろう。 ・日本の食料自給率を上げるためにはどのような活動が必要なのだろう。	・農林水産省からのグラフや表を使いながら、理解を深め、動機づけをする。	ア②
3	松原ファーム開墾から収穫に向けての目的を明確化 ・前時の課題を解決するために自分たちができることは何だろう。 ・松原ファーム開墾から収穫までの工程を伝える。	・身近にできることをKJ法を使って、全員が意見を言えるようにし、発表をしてクラスで全体で意識統一を図る。	イ② ウ
4 5	松原ファームの開墾、堆肥を入れる ・畑となる場所の草むしりと石拾いを行うのはなぜだろう。 ・馬糞堆肥と給食残さ堆肥を混ぜるのはなぜだろう。		ア② イ② ウ
6	畝づくり ・収穫量を計算しながら畝の数がどれくらいあればいいかを考える。	・地域や行政、民間企業に協力いただき、生徒との活動を支援する。	ア② イ② ウ
7	畑の防寒や防虫、防草作業 ・畑の防寒作業が作物にどのような影響を与えるのか。 ・なぜ定期的に手入れをする必要があるのだろうか。		ア② イ② ウ
8	収穫 ・どのような春大根が商品となるかを考える。	・春大根の大きさや太さなど、生徒の想定と異なる部分を次年度の課題として考えさせる。	ア② イ②
9	地元の農畜産物交流センターでの販売 ・収穫した春大根をブランド化するにはどのようにすればよいだろうか。	・1年生の作成したポップアートを活用する。	ウ
10	松原ファームの取組の振り返りと次年度に向けて ・来年度、松原ファームでの活動について考える。	・持続可能な取組であることを意識させる。	イ② ウ

